

卒後3年目以上の看護師へのフィジカルアセスメント研修の有効性

秦野赤十字病院 看護部

○新野尾 里沙

【はじめに】集中ケア認定看護師として院内のラウンドを行う中で、ベッドサイドにおけるフィジカルアセスメント能力が乏しいことを実感した。そこで既卒者へのフィジカルアセスメント研修を実施していく必要があると考えた。2013年から3回/年にわけて、新人同様に脳神経、体温、呼吸、体液、循環のフィジカルイグザミネーションとアセスメント方法、適切な記録を取り入れた講義と実技、グループワーク形式の研修を実施した。そこでこの研修の有効性と今後の課題を明らかにする。

【方法】卒後3年目以上の看護師55名に研修終了後、脳神経、体温、呼吸、体液、循環の各項目の理解度とその理由を自由記載としたアンケートを実施した。

【倫理的配慮】院内の倫理委員会の承認を得た。

【結果】アンケートは単純集計とし回収率は100%であった。各項目の理解度は脳神経88%、体温95%、体液92%、呼吸95%、循環90%が理解できたとの回答であった。また、学んだことを実践できるかの問いには21%が実践できないとの回答であり、その理由としては「自信がない」が多かった。

【考察】各項目の知識としての理解度は高く、研修への満足度は得られているのではないかと考えられ、研修は有効であった。しかし、実践への不安や心配を抱えていることから研修の受講だけでは知識と実践が結びついていないと思われる。この不安や心配の要因としては、学んだ知識を現場で実践するための技術やアセスメント能力の欠如であると考えた。臨床経験があっても講義と実技を取り入れた研修だけでは、理解と実践は結びつかなかったと考えられた。

【まとめ】研修直後から実践できるように事例を多く取り入れた研修内容にしていく必要がある。そして、ベッドサイドにおいてフィジカルアセスメントを確実に実践できるようにタイムリーに現場で指導していく必要がある。

新人教育体制変更に伴う新人教育に対する臨床面での関心の变化

足利赤十字病院 東6階病棟

○岡田 真衣、三井 茜、今野 鮎美

【目的】当院では平成23年度より新人教育体制を実地指導・エルダー制度に変更し、3年が経過した。平成26年度、私たちは実地指導とエルダーを行い、以前の教育体制より病棟全体での関心が高い傾向にあると感じたため、さらに有意義な教育体制にしていける必要があると考えた。本研究では、新人の技術獲得に対する進捗状況の把握を「関心」と位置付け、看護師の意見を集約すること、新人教育の現状を把握することを目的とした。

【方法】1. 研究期間 2014年8月～11月 2. 研究対象 A 病院5年目以上の看護師240名 3. データ収集・分析方法 自作のアンケートによる質問紙法 4. 倫理的配慮 本研究は当院の倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】回収数215名(89.5%)有効回答209名(97.2%)。「新人教育の関心度」について、「新人教育の経験がない」(以降A群とする)「プリセプター・実地指導両方の経験がある」(B群)「実地指導のみ経験がある」(C群)の3群に分けて分析した。「新人教育への関心度」が「高まった」と答えた割合はA群44.7%、B群42.1%、C群78.9%であった。「どちらでもない」はA群42.1%、B群46.1%、C群が15.8%であった。関心度の変化について、A群とB群は「プリセプターとエルダーの違いが良く分からない」という意見をあげており、C群では「指導者間で話し合う機会が多い」「病棟スタッフ全体が新人指導に協力的」という意見をあげていた。

【結論】アンケートの結果から全体の73.3%を占めるA群B群は関心度の変化はあまりなく、A群B群の意見から変更された教育体制が理解されていないことがわかった。このことから今後の課題として教育体制変更後のメリットを看護師に周知していくこと、および病棟全体の協力体制を得るような統一した周知システムの構築が必要であると考えた。

O-5-17

抗がん剤による過敏症対応シミュレーション訓練の効果と今後の課題

熊本赤十字病院 看護部

○田上 ひとみ、上羽 郁子

【はじめに】抗がん剤には過敏症を起こしやすい薬剤があり注意深い観察と早期発見・早期対応が求められる。A病院では、H21年度より抗がん剤による過敏症への対応シミュレーション訓練(以下シミュレーション)を行ってきた。今回その効果を検証し、より効果的なシミュレーションと安全で安心な看護の提供につなげるための課題を明らかにする目的で、当該病棟の看護師196名を対象にA病院の倫理審査後にアンケート調査を実施した。

【結果・考察】がん化学療法を行っている病棟は7病棟で、シミュレーションの経験がある看護師は108名(71%)であった。シミュレーションを行ったことで過敏症発生時の対応手順の理解ができたものは106名(98%)、前駆症状が理解できたものは105名(97%)、新しい知識を得ることができたものは101名(93%)、業務に役立たと回答したものは104名(96%)であった。実践を行う上で気持ちの変化があったものは88名(81%)、行動の変化があったものは81名(75%)であった。またシミュレーション後に実際に過敏症を経験したことがある看護師は32名(29%)で、「観察の視点が増えた」「患者への声かけが増えた」「日頃からイメージをつけておく事が大事」等の回答が得られた。また「繰り返しの訓練が必要」という意見が多かった。シミュレーションにより過敏症出現時の状況を具体的にイメージし、体験しながら学ぶことで知識や観察視点の広がり、安全への意識の向上、患者への丁寧な対応など行動や気持ちにも変化を及ぼすことができると考えられた。

【まとめ】シミュレーションは、繰り返し継続していくことで安全で安心な看護の提供につながると考えられた。今後は看護師全員が経験できるように、訓練の方法を検討していきたい。

O-5-18

HCUでの急変対応

～シミュレーションを通した二次救命処置への理解に向けて～

日本赤十字社長崎原爆病院 看護部¹⁾、同 循環器内科²⁾○藤井 猛¹⁾、林 真紀¹⁾、伊藤 麻里¹⁾、荒木 究²⁾

【はじめに】A病棟では、2011年4月開設以来、一次救命処置、特に質の高いCPRのための手技獲得を目的とし、年2回の急変時シミュレーションを行ってきた。過去のA病棟でのCPR事例を記録上で振り返ったところ、AHA等のアルゴリズムに沿った蘇生処置が実践されたものは、13例中1例で、二次救命処置が十分に行えているとは言い難い状況であった。そこで今回、二次救命処置の流れを理解するために、シミュレーションを実施しその有用性を検討した。

【方法】病棟看護師12名にシミュレーション前後でアンケートとテストを実施した。テストは循環器内科医の協力を得て作成し、結果を対応のあるt検定を用いて比較した(有意水準5%)。シミュレーションについては、急変患者を発見したところから始め、一次救命処置から二次救命処置へと移行し約10分間実施、その後デブリーフィング等を行った。なお、本研究は院内倫理委員会にて承認を得た。

【結果】テスト結果は、全体としてシミュレーションの前後において有意に点数が下がった。二次救命処置で使用する薬剤についての知識も、有意に向上したが、正解率55%とその理解は不十分と思われる。アンケートからは全スタッフがシミュレーションの必要性を感じ、一次・二次救命処置への関心が高まったことがわかった。

【考察】今回のシミュレーションは、二次救命処置の流れの理解に有用であった。今後、テストから得られた弱点を補強するため、継続的なシミュレーションを実施することが、スタッフの二次救命処置への意識を高め、実際の急変患者対応につながると考える。また、医師などのコメディカルスタッフを交えたより実践的なシミュレーションを検討したい。

O-5-19

実践報告 SWOT 分析によるクラスの現状分析を富かした学習支援

富山赤十字看護専門学校

○田丸 早苗

SWOT分析による現状分析は、様々な組織で実施されている。看護領域においても施設の組織分析として実践され研究報告もされているが、教育現場におけるクラスの現状分析についての報告はない。前回、クラスを一つの組織とみたてSWOT分析による現状分析を行い、クラスの特徴を生かした国家試験対策を実施し成果があったと考える。今回、2年生のクラスを受け持つ機会を得、受け持ち時から意識的にクラス分析を行い学習支援したことで報告する。クラスの現状として、意味を考えずに言われたことをする、内容を理解せず言われたとおり物事をすすめる、「することができた (do)」=「できた (can)」などの自己評価が高く勉強しない等がみられた。その結果、学習の積み重ねが困難となり実習成績は回を重ねるごとに下がっていた。口頭で現実を伝えてもものんびりしており危機感も全くみられなかった。しかし学生は全体に素直だったので素直さを強みとして、3年生の実習中(5月と7月)にクラス全体で看護技術演習を実施した。学生が実習内容と関連する国家試験問題も取り入れた事例を設定し、学生が看護技術を演じながら説明する形式の演習にした。また学生たちが自己の現状について認識できるように見える化をはかった。具体的には、厚生労働省の看護基礎教育で必要な看護技術項目の到達状況や模擬試験の結果について、学生の同意を得てグラフ化し教室に掲示した。改めてクラスをSWOT分析による現状分析をしたことで、クラスの強み弱みを捉え、クラスの特徴を生かした学習支援が実践できたのではないかと感じた。学生一人ひとりの個性に応じた教育活動に加えて、クラスの現状分析をして、クラスの個性に応じた教育活動も重要である。

O-5-20

シミュレーション学習での看護学生の学び

諏訪赤十字看護専門学校 教務部

○武川 亜希子、小林 美佳

【はじめに】当校では、学生が患者の状況に応じた看護実践ができる力をつけるためにシミュレーション学習を実施している。平成25年度の授業リフレクションから、シミュレーションが目的となり、何を学んで欲しいのか不明確となっていた。そのため「ねがい」に戻り、何を学んで欲しいのかを考え、授業方法を検討し実施した。シミュレーションで具体的に思考・行動ができるように指導し、シミュレーション後のデブリーフィングを取り入れ、実習での実践に生かせるように関わった。今回の取り組みを振り返り考察する。

【方法】対象：3年過程看護学生2年生 倫理的配慮：対象に研究の趣旨を説明し協力の有無は成績に影響しないことを伝え質問紙の回収をもって研究への同意が得られたとした。方法：事例から患者の状況を個人でアセスメントする。患者の状況に応じた援助をグループで計画・実施する。演習終了時質問紙を配布し、結果を分析する。

【結果】回収率100%(BR) 質問紙は2カテゴリー「シミュレーションの準備と実施」、「演習後の振り返り」の13項目で学習の達成度を4段階評価とした。それぞれのカテゴリーの平均値を算出し、昨年度と学習の達成度を比較した。「シミュレーションの準備と実施」では、平成25年度2.7±SD0.26に対し、平成26年度3.2±SD0.18、「演習後の振り返り」では、平成25年度3.1±SD0.26、平成26年度3.3±SD0.16という結果が得られた。

【考察】「シミュレーションの準備と実施」、「演習後の振り返り」に重点をおいて授業方法を検討し実施した。シミュレーションで具体的に考え、行動できるように指導したことは、実習での実践につながると考えられる。また、シミュレーション後のデブリーフィングを行ったことで、学生は客観的な視点で考えることができ、気付きを整理し学びにつながり、実習での実践につながると考えられる。